

[巻頭言]

## 大学教育に突き付けられる根本的な問いのゆくえ

情報教育センター所長 石橋 潔

情報教育は大きな変化のただ中にある。

一つは大学教育で急速にオンライン化が進んだことだ。コロナ禍、どの教員も、そしてどの授業形態も、オンライン授業を試すことになった。それまで一部の授業でしか利用されていなかった LMS (本学では KUEST e-learning) がすべての授業のプラットフォームとなった。対面する空間でこそ大学の教育は成り立つという常識を大きく覆すものとなった。

もう一つは AI (人工知能) の登場である。昨年末に登場してきた ChatGPT はインターネット上で蓄積されたデータをもとに自然な言語 (多言語) で流暢に質問に答える。それは驚くほどのものだ。現在、世界中で、そしてさまざまな分野で強烈なインパクトを与え始めているように見える。

そして久留米大学も変化する必要に迫られている。昨年、理事長のもとに DX (デジタルトランスフォーメーション) 元年を宣言した。そこには経営体として積極的にデジタル化を進めなければ、組織の未来が危ういという危機感がある。

このような組織内外の変化が、大学と教育にどのように影響するかについて、正直なところ、現時点で予測つかない。短期的には、こうした変化への門を開け閉めしながら、大学の教育のなかにどのように取り入れるか試すことになりそうだ。しかしいずれ拒否はできなくなり共存することになるだろう。問題はそのとき、大学の教育ということが根本的な変化を受けるのではないかということだ。はたして大学は人と人が対面する場である必要があるのか。教える側は人でないといけないか。伝達されるのは、文字で書かれた専門知識である必要があるのか。こうした根本的な問いをいずれ投げかけられるだろう。

この変化に対応していく方針は何かがあるか、そう問われれば、「手探りをしていく」という答えしか、今のところ思いつかない。きわめて人間臭いやりかたでしかないが。

今後のこのコンピュータジャーナル掲載される論文や報告は、ジャーナルが発行される限り、この変化に適応するための、さまざまな手探りの記録をここに残していくことになるだろう。